

文化

日中戦争時の文藝春秋欧文付録を翻訳

「Japan To-day」研究 刊行

島崎藤村ら幅広い

知識人が寄稿

日中戦争の最中に発行された文藝春秋の欧文付録を翻訳・解説した「Japan To-day」研究 戦時期「文藝春秋」の海外発信」が刊行された。編集にあたった国際日本文化研究センターの鈴木貞美教授は、「作家の島崎藤村をはじめ、文学や芸術、政治など幅広い分野の知識人が寄稿しており、戦中の思想状況を知る貴重な資料」としている。

「戦中の思想知る貴重な資料」

日中戦争期の日本の思想状況を読み解く「Japan To-day」研究



末に折り込んで配布され、海外の言論機

関などにも送られたとされる。8ページのフロント判で、英語やフランス語、ドイツ語による日本文化を紹介する寄稿や国内外の情勢記事、写真グラフィックなどで構成された。

「Japan」は国際的に反日色の濃くなった1938年「民間による国際宣伝」をうたった文藝春秋創設者の菊池寛の責任編集によって創刊された。同年4と10月号の巻

国内調査で2身分しか見つからなかったが、米国に全号そろった公立図書館が数力所あることが確認され、ニューヨーク公立図書館所蔵のもの

を研究者18人が手分けして翻訳、解説した。

創刊号は、菊池自ら執筆した巻頭記事「日本の現代文学」や、すでに国内外で知名度が高かった島崎藤村のエッセー「西欧化の風潮と日本女性」、画家の藤田嗣治がバプロ・ピカソあてに日本の魅力を紹介する手紙などが掲載されていた。

以降も外国人をまじえながら、実業家で宝塚歌劇団創始者の小林一三、ジャーナリストの長谷川如是閑、近衛文麿内閣のフレーンで京都学派の哲学者三木清といった多彩な執筆者が名を連ねる。三木の「我々の政治哲学」は、後に近衛内閣が唱える「東亜新秩序」を感じさせる内容だった。

鈴木教授は「言論弾圧が強まるなか、菊池ら自由主義者が戦争にかかわっていく過程を伝えている。20世紀前半の思想全体の見直しにつながる」と語る。

作品社。5040円。

(吉田恭彦)